現代インドにおけるヴェーダ祭式の文化的・社会的プレゼンス
――ケーララ州の事例から探る――

代表　手嶋英貴（京都文教大学教授）

世界最古級の宗教文献であるヴェーダはその内容の精査自体，人類史の一部を明らかにする学術的価値を持つ．しかしヴェーダは単なる過去の遺物ではない．現代のインド，とくに南部のケーララ州では，写本と口頭の両面でヴェーダ聖典が良好に伝えられている．またその伝承に基づく現実のヴェーダ祭式が，今に至るまで挙行され続けている．それらの祭式は，古代以来の伝承に基づきながら，現地の人々の生活に根づき，また変容する現代社会とも密接に関わる「生きた伝統」として存在している．この局面に光をあてる時，ヴェーダを主な研究対象の一つとするインド学は，古代のみならず，現代インドの文化・社会を理解するための重要な知見を提供するものとなる．本パネルでは，こうした問題意識から，ケーララ州のヴェーダ祭式を取り上げ，文献学と現地調査の両面から得られた諸情報を，各登壇者の視点から報告した．その後に行われたパネル討論を含め，インド学の豊かな研究蓄積が，インドを対象とする他の学問領域（文化人類学，宗教学，歴史学，地域研究など）の関心や成果とどう連携しうるか，という課題を会場全体で共有することに努めた．

1. 井狩彌介（京都大学名誉教授）「ケーララにおけるヴェーダ伝承研究をめぐって――回顧と展望――」

本報告では，ヴェーダ文献研究者が20世紀後半以降，古代インドへの関心を出発点としながら，次第に現代のヴェーダ伝承へとその視点を広げてきた経緯が紹介された．ドイツの研究機関によるネパールでの写本収集などを通じて，1960年代から70年代にかけて，ヴェーダ写本調査とそれに基づく伝承分布の再検討が進んだ．その動きを背景に，Asko Parpola や Frits Staal が南インドでの調査に着手し，写本のみならずそこに残存していたヴェーダ口頭伝承も知られるようになった．当時ヴェーダ祭式の挙行がほとんど途絶えており，その断絶に対する危惧から，1975年にアグニチャヤナ祭の詳細な記録が，研究者の国際的連携により行われた．本報告では，そのアグニチャヤナ・プロジェクトに参画した報告者自身の知見とともに，以後のヴェーダ写本調査が，それを伝承するブラーマン社会の理解へと結びついていったことが示された．

2. 手嶋英貴（京都文教大学教授）「ヴェーダ伝承者たちと儀軌文献――祭式を維持する文化的・社会的基盤――」

本報告では，現代のヴェーダ祭式がどのような社会集団により，また何に依拠して行われているかが述べられた．ケーララ州には，カウシータカ，アーシュヴァラーヤナ，バウダーヤナ，ヴァードゥーラといった流派がある．またそれぞれに固有のヴェーダ儀軌（スートラ，プラヨーガ，チャダンガ等）が伝承されている．そのうち，チャダンガ（*catanmu*）と呼ばれるマラヤーラム語文献は，現地のブラーマンが直接参照するヴェーダ儀軌であり，現代祭式の実態を知る上で重要である．本報告では，アグニホートラ規定の一部を例示し，チャダンガがスートラにない所作の挿入や祭事の略儀化を含んでいることを示した．スートラ段階から改変された部分を含むものではあるが，こうした現地語による儀軌の存在が，祭式伝統を支える基盤となっていることを示唆した．

3. 梶原三恵子（東京大学准教授）「グリヒヤ祭式にみる『伝統』と『慣習』」

本報告では，ケーララのヴェーダ祭式のうち，グリヒヤ祭の伝統がどのように維持されているかが述べられた．グリヒヤ祭の中核は一連の人生儀礼である．現代ケーララのバラモンは自らの人生儀礼が「グリヒヤスートラ」に遡ると捉え，ヴェーダの伝統を強く意識している．主な人生儀礼は「十六行事」とよばれる儀礼一覧に列挙されて記憶され，学派ごとの儀軌が保存されている．ケーララの「十六行事」は各学派ともグリヒヤ祭に属するヴェーダ学習関連儀礼六種とシュラウタの基礎祭式一種を含み，ヴェーダ伝統の維持と密接に関わるのが特徴である．これらの儀礼には時代とともに形骸化も見られるが，形だけでも慣習的に継続することで，情勢が変われば実質を伴う伝統的な形に戻ることを可能としている．こうして，グリヒヤ祭の継続的挙行が，ヴェーダ伝承の，さらにはシュラウタ祭の伝統の継続をも下支えしていることが示唆された．

4. 藤井正人（京都大学教授）「シュラウタ祭式を継承する力学――バラモン社会と個人――」

本報告では，ヴェーダ聖典とヴェーダ祭式（特にシュラウタ祭式）が，どのような状況のもとに維持されてきたかが詳しく示された．ケーララ土着のバラモンであるナンブーディリは，「ヴェーダ学派」，「家系」，「グラーマム」という三つの帰属集団を持っている．祖先がかつて同じ村に住んでいたと伝えられる人々の集まりであるグラーマムは，シュラウタ祭式を行う祭官組織の基盤となっている点で重要である．諸グラーマムの間には，伝統的にシュラウタ祭の挙行を競い合う意識があり，それが過去の祭式挙行だけでなく，近年におけるシュラウタ祭復興のモチベーションとなっていることが示された．報告の後半では，サーマ・ヴェーダのジャイミニーヤ派を例に，ヴェーダ伝承のより具体的なあり方が紹介された．そこでは，ケーララ州とタミル・ナードゥ州の双方に残るサーマ・ヴェーダ伝承の比較もなされ，地域ごとの伝承の相違点についても知見が共有された．